

ご参加いただいた非会員の皆様へ

謹啓 時下、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

此の度は、第 57 回日本神経学会学術大会にご参加いただき、誠に有難うございました。幸い連日好天にも恵まれ、お蔭さまで 7,463 名という多くの皆様にご参加いただきまして、無事終了することができました。これもひとえに皆様のご協力とご支援の賜物と、心より御礼申し上げます。

神経疾患は、患者数の非常に多い脳卒中・認知症から希少難病にいたるまで、広範囲にわたります。一般に神経疾患は治らないというイメージが強いようですが、最近では例えば脳卒中は急性期治療の進歩もさることながら後遺症に対してもロボットスーツやボツリヌス治療など新たな治療法が開発されつつあります。多発性硬化症や重症筋無力症、パーキンソン病といった神経難病に対する治療も充実してきました。一方、認知症や多くの神経難病の治療は症状を改善させる程度に効果がとどまっていますが基礎研究においては目覚ましい成果があがっておりそれが実用化されるのも遠くないと思います。

徳島大学神経内科は 2000 年 11 月に私が初代教授として赴任した後 2003 年に正式に神経内科の講座として開設されました。歴史が浅くスタッフの数も少ない主催校であったため、至らぬ点多々あったこととお詫び申し上げます。当教室では、開設以来、一貫して「なおる神経内科」を目指しておりましたが、それを今回のメインテーマに、また教育セッションを増やして「わかる神経内科」をサブテーマにさせていただきました。「なおる神経内科」に関しましては基礎研究から臨床試験まで幅広くご発表をいただくとともに治療法開発に関してシンポジウム「行政のキーパーソンに聞く神経疾患研究への期待」「世界に発信する日本の創薬：神経難病の克服に向けて」も実施いたしました。「わかる神経内科」としてその分野における大家によるレクチャーマラソンとともに少人数事前登録制による教育コースを本大会の目玉として実施いたしました。特に教育コースは 40 を超える多彩なコースがほとんどで立ち見ができるほどの盛況をみました。これらの多彩な企画においてたくさんの先生にご提案をいただき講師もおつとめいただきましたことを重ねて心より御礼を申し上げます。

徳島大学神経内科の医局員、および学術大会運営事務局一同、神戸にありながら徳島も感じていただくおもてなしを心掛けまして、精一杯大会運営にあたらせていただきました。会期中は不行届きの点多々あったかと存じますが、何卒、ご寛容下さいますようお願い申し上げます。本来ならば、拝眉のうえ御礼を申し上げなければなりません、略儀ながら御礼のご挨拶とさせていただきます。

末筆となりますが、皆様の益々のご活躍とご健勝を心よりお祈り申し上げます。

謹白



平成 28 年 5 月 31 日

第 57 回日本神経学会学術大会 大会長
徳島大学臨床神経科学（神経内科） 梶 龍児

【大会長校事務局】

徳島大学大学院医歯薬学研究部医科学部門内科系臨床神経科学分野

【学会事務局】

日本神経学会事務局

【運営事務局】

第 57 回日本神経学会学術大会運営事務局（株式会社コングレ）